

ナジブ氏が第6代首相に就任 (2009.4.3)

ナジブ首相の「1つのマレーシア」

山本博之
(京都大学)

首相に就任して「1つのマレーシア」を掲げたナジブが真っ先に行ったことは、町に出てマレー人、華人、インド人とそれぞれ会うことだった。翌日の地元紙には、町で人々と握手し、談笑しているナジブの様子を示す3枚の写真が掲載された。ここに象徴的に表れているのは、マレーシアをマレー人、華人、インド人の3つの民族の連合体と見て、政治経済を含む社会生活のほとんどすべての面を民族ごとに担当する「民族の政治」の考え方だ。「民族の政治」への批判が高まり、民族別でない社会を求めた野党連合・人民協約が今年の総選挙で支持を伸ばしていたが、それに対してナジブは「民族の政治」をより強化するというメッセージを発したということになる。

ナジブ率いる与党連合・国民戦線は国民からの支持を回復し、政権基盤を立て直すことができるのか。その実現より前に、意外にも早い時期にナジブが政権を明け渡すことになるとしたら、その鍵はナジブが首相就任直後に行った2つのことにあるだろう。

ナジブは国内治安法 (ISA) で拘束されていた13人を釈放した。インド系の政治活動家が釈放されたことが注目された裏で、サバで大きな問題となっている身分証明証偽造の容疑がかけられた人々も釈放されている。ナジブは裁判なしに拘束できるISAを見直すことを表明しており、今回の釈放もそれとあわせて歓迎されるべきことではある。ただし、もし身分証明証偽造が国家の安全に対する現実の脅威だと考えてISAによる拘束を行ったのであれば、捜査を進めて身分証明証偽造の仕組みを明らかにし、関係者を処罰するなどしてこの問題に適切に対応すべきだろう。もし今後そのような具体的な取り組みが見られなければ、今回の釈放は政治的パフォーマンスにすぎず、サバは弄ばれたという印象を与えることになりかねない。これは「1つのマレーシア」からさらに遠ざかることになる。

もう1つはメディア対策だ。ナジブは野党の機関誌の発禁処分を解いた。批判勢力を力づくで黙らせても別の場所で噂が広まり、それを国民が受け入れるという時代の変化に対応して、

メディアに寛容な態度を示すかわりにナジブに対する個人的な批判を抑えるという狙いがあるのだろう。しかし、メディアにとって政権批判は重要な役割の 1 つであり、ナジブに対する批判的な報道をなくすことはあり得ない。ナジブが個人的に抱える疑惑を解消しない限り、批判は繰り返されることだろう。それに対してナジブがどこまで対応できるかはわからない。

サバの人々に新政権への思いを尋ねると、多くの人から「ドリアンが落ちるのを待つ」という答えが返ってきた。ドリアンの実は、木に実っているときに食べると体を壊すので、木から落ちるのを待ってそれを食べろという暮らしの知恵から来た言いまわしだが、好ましくない事態があっても拙速を避け、時が熟すのを待って、時が来たら行動に出るという意味で使われる。ナジブ政権は好ましくないが、次の総選挙まで待ち、そこで自分たちにできることをすると確認している。ナジブには、その時まで「1 つのマレーシア」を真の意味で具体化させるという課題が課せられている。■